

# メフメト 2 世時代初期の宰相たち

今 澤 浩 二

## はじめに

以前、オスマン朝初期における宰相制の展開について考察を行なった。草創期においてはウレマー階層の人間 1 人が宰相となり、行政・軍事等、国家全般の運営を担ったが、その後しだいに複数化し、第 2・第 3 宰相となった軍人が軍事面を担当するようになった。ムラト 2 世時代には宮廷奴隷が宰相となり、ウレマー階層の宰相との権力抗争も激しくなった [今澤 2013]。

メフメト 2 世時代にはついに宮廷奴隷が大宰相に就くことになり、オスマン朝の宰相制は新たな局面に入った。本稿ではこの時期の宰相制の展開を跡づけるために、まずムラト 2 世時代からメフメト 2 世時代初期にかけて宰相職を務めた人物を中心に検討を行なう。

## 1. チャンダルル・ハリル・パシャ

この人物が属すチャンダルル家は、草創期から宰相として歴代スルタンを補佐してきたウレマー家系である。ムラト 2 世時代の 1429 年、大宰相であった父イブラヒムの死後、ハリルはカザスケルから第 3 宰相となり、

---

キーワード: オスマン朝, メフメト 2 世, ムラト 2 世, 宰相, 15 世紀

1439年以降は一貫して大宰相位を保持した [今澤 2013 : 74-75]。

1451年2月3日、ムラト2世がエディルネで病没するとハリルは、アナトリア西部マニサ地方の太守であった皇子メフメトに使者を送り、急ぎ出立するよう知らせた [Doukas: 187; Kemal: 5]。カルココンディラスによると、エディルネではムラトの死を知ったイエニチェリが暴動を起こそうとしていたが、ハリルが他のカプクル軍を率いて鎮圧したという [Chalkokondyles: 161]。

2月18日、メフメトはエディルネに到着し、メフメト2世（位1444～1446, 1451～1481）として2度目の即位を果たした。その際ハリルが引き続き大宰相の地位にとどまったことは諸史料が一致して伝えるところである。ケマルパシャザーデは次のように記す。

「〔メフメト2世が即位した際〕聡明で賢明な3人の宰相を得た。ハリル・パシャ、サルジャ・パシャ、イスハク・パシャである。イスハク・パシャを、父（ムラト2世）の棺とともにブルサに送り、代わりに自身のアタ・ベイであったシェハーベッディン・パシャを宰相にした。カラマン侯の反乱を鎮めることができなかったため、アナドル・ベイレルベイのオズグル・オール・イーサー・ベイを解任し、イスハク・パシャを彼の代わりにその地域のエミールたちの長にした」 [Kemal: 19]

同時期に成立した『八天国』でも、ハリル、サルジャ、イスハクが宰相になったと記される<sup>1)</sup>。オルチは、

「スルタン・ムラトの息子スルタン・メフメトが、855年ムハッレム月16日（1451年2月18日）木曜日、エディルネで即位した。宰相はハリル・パシャ、サルジャ・パシャ、ハードゥム・シェハーベッディン・パシャ、イスハク・パシャであった。イスハク・パシャはその後、解任され、アナドル・ベイレルベイとなった。オズグル・オール・

## メフメト 2 世時代初期の宰相たち

イーサー・ベイは解任された。ルメリ・ベイレルベイはカラジャ・ベイという者がなった」[Oruç-P: 53a; Oruç: 64]<sup>2)</sup>

と記しており、これはケマルパシャザーデの記述と合致するように思われる。なぜならオルチの記述は、ケマルパシャザーデが記すようにイスハクが解任されてその後任にシェハーベッディンが任じられたことをひとまとめにしたものと考えられるからである。

つまり、メフメト 2 世が即位した時点で、大宰相チャンダルル・ハリル、第 2 宰相サルジャ、第 3 宰相イスハクというように、即位当初は前代君主の宰相たちを継承することになった。これは、それまでのオスマン朝の慣習に従った順当なものであった。ただし、イスハクはその後まもなくブルサに送られたのちアナドル・ベイレルベイに任命され、代わって、皇子時代からの側近であるシェハーベッディンを宰相に取り立てることになった<sup>3)</sup>。

同年春、メフメト 2 世は、反乱を起こしたカラマン侯に対し進軍した。この遠征にはハリルも同行し、山中に逃げ込んだカラマン侯と交渉して降伏させることに成功した [Chalkokondyles: 163]。

この遠征中、ビザンツの使者がオスマン軍営にやって来て、コンスタンティノーブルに匿っている王位主張者オルハン・チェレビ（第 4 代スルタン、バヤズィト 1 世の息子エミール・スレイマンの孫とされる）の監視料を倍増することを要求し、さもなくばオルハンを解放すると威嚇した。ムラト 2 世時代以来、ビザンツとの友好関係維持に腐心してきたハリルは、まるで逆効果な要求を行なうビザンツの無神経さに怒り、使者を叱責した [Doukas: 192-194]。

同年秋、メフメトはヴェネツィアとの条約を更新し、ハンガリーとは 3 年間の休戦協定を締結したが [Doukas: 192]、イナルジクによるとこれらの条約を結んだのはハリル・パシャであった [İnalçık 1957: 510; İnalçık

2003: 397]。外交交渉は大宰相の重要な任務の一つであり、ハリルはムラト2世時代から引き続き西方と融和的な外交政策を採ったと考えられる。なおスフランツェスによると、ハンガリーとの条約交渉に入る前、スルタンの使者がセルビア公ジュラジ・ブランコヴィチを訪れ、仲介役を要請した。その際、御前会議の構成員の一部からブランコヴィチに対し、ハンガリーとの条約が締結されるとスルタンはコンスタンティノーブルに進軍するつもりであるから、条約締結を遅らせるよう伝えられたという [Sphrantzes: 71]。この御前会議の構成員というのは、おそらく、コンスタンティノーブル包囲に反対していたハリルの一派であろう。

果たして翌1452年春になると、メフメト2世は包囲の準備を開始する。その重要な一つが、ボスポラス海峡を封鎖するためのルメリ・ヒサル建設であった。メフメトは宰相たちに塔の建設を命じ、ハリルは海峡に面する塔の建設をまかされた [Doukas: 196; Oxford Anonymous: 448]<sup>4)</sup>。また、ハリルはウルバン砲の鑄造を監督し、コンスタンティノーブル内部の情報収集も命じられたといわれる [Uzunçarşılı 1974: 71]。

エディルネで開かれた御前会議では、ハリルがコンスタンティノーブルの城壁の堅固さを理由に包囲に反対したが、ザガノスをはじめ多くの者が賛成にまわり、大勢は決した [İnalcık 1954: 125-127; İnalcık 1957: 510; Uzunçarşılı 1974: 72; İnalcık 2003: 397]。おそらくこれを受けてハリルは1453年2月、ビザンツ皇帝コンスタンティヌス11世（位1449～1453）に使者を送り、スルタンがコンスタンティノーブル攻撃を決意したことを知らせた [Phillipides & Hanak 2011: 573]。オスマン朝史料によると、ハリルと親交を持っていたビザンツ皇帝が宰相ルーカス公（Kir Lûka; 大公ルーカス・ノタラス Loukas Notaras）をハリルに派遣し<sup>5)</sup>、魚の腹に金貨を忍ばせて賄賂を贈ったという。そのためハリルはメフメトに攻撃を思いとどまらせようと、さまざまな手段を用いたが無駄であった [Âşık-G: 131-

132; Âşık-Ö: 226b-227a; Oxford Anonymous: 448; Neşrî-Mz: 180; Neşrî-A: 688; Kemal: 88-90]。ビザンツ史料においてもハリルは「異教徒の仲間 (gâvur ortağı)」と呼ばれ、ビザンツの友として多くの賄略を受け取っていたことが記されている [Doukas: 193, 202; Philippides & Hanak 2011: 484, n. 37]。

同年春、メフメトはコンスタンティノーブル包囲のため、宰相たちに軍隊の召集を命じた。即座に使者がバルカンとアナトリアに派遣され、すべての軍隊がエディルネに集結した [Oxford Anonymous: 448]。かくして 4 月 6 日、コンスタンティノーブル包囲が開始された。オスマン軍の本隊はテオドシウスの大城壁の前に布陣したが、ハリルもメフメトとともにオスマン軍の本営についた [Kritovoulos: 42]。しかしビザンツ史料によると、包囲開始後まもなく、オスマン軍の大砲が破裂し、攻撃がままならなかった。このためスルタンはもっと大きな大砲の鋳造を命じたが、決して完成することはなかった。そこにはビザンツの友人であるハリルの差配があったとされる [Leonard: 16; Phillipides & Hanak 2011: 484, n. 37]。

4 月 20 日、食料を積んだジェノヴァ船とビザンツ船がエーゲ海からコンスタンティノーブル救援に至った。メフメトはこれらの船が金角湾に入るのを阻止するようオスマン海軍に命じたが、最終的には入港を許すことになった。この事件を受けてオスマン軍内で軍事会議が開かれた。ハリルが包囲中止を要求し、また多くの者がそれに賛同した。しかし、スーフィーやウレマー、特にメフメトの精神的支柱であるアクシムセッディン、モッラー・ギュラーニー、ザガノスらが包囲継続を主張し、けっして和平に同意しなかった [Hasht 2197: 371b; Hasht 2198: 102a; İnalçık 1954: 128]。

有名なオスマン艦隊の陸揚げ作戦が決定された 4 月 22 日の軍事会議においても、ハリル率いる和平派とザガノスらの主戦派が対立した [Babinger 1978: 88; Uzunçarşılı 1974: 74]。

終盤、なかなか大城壁を突破できないオスマン軍に対し、イタリアから多くの艦隊が送られ、またフニャディ・ヤーノシュはハンガリー軍を率いてドナウ川に接近しているとの情報がもたらされ、オスマン軍内が浮き足立つことになった。5月25日、軍事会議が開かれ [Phillipides & Hanak 2011: 577], そこでハ ril はコンスタンティノープル包囲の中止を訴えたが、第2宰相のザガノスは作戦の継続を主張した。これに第3宰相の宦官長 (シェハーベッディン) や主だった軍人たちが同調したため、スルタンは包囲の継続を決定した。ハ ril は密かにビザンツ皇帝に使者を送り、その状況を伝えた [Leonard: 31-33 ; Tedaldi-M: 5-6; Tedaldi-P: 169-179; Sphrantzes: 117; Phillipides & Hanak 2011: 517 (n. 134), 577]。かくして29日早晩、総攻撃が敢行され、ついにコンスタンティノープルは陥落した。

コンスタンティノープル征服の翌日、ハ ril はメフメト2世によって捕らえられ、投獄された。財産もすべて没収された。1446年にメフメトがハ ril の画策で王位を追われたこと、コンスタンティノープル包囲ではハ ril が敵と通じ、たえず反対し続けたことなどがその理由として挙げられる。ビザンツ史料によると、捕虜となったルーカス・ノタラスによって、ハ ril がギリシア人にきわめて友好的で、しばしば皇帝に書簡を送って、メフメトと和平せず抵抗するよう勧めたことが暴露された [Leonard: 39-40; Phillipides & Hanak 2011: 602]<sup>6)</sup>。その後まもなくハ ril はエディルネまたはコンスタンティノープルで処刑された [Leonard: 40; Oruç: 66-67, 124; Oruç-P: 55a, 80a; Oruç-M: 54a; Kemal: 88-90]<sup>7)</sup>。

## 2. サルジャ・パシャ

この人物は宮廷奴隷で、ギリシア人であったとされる。ムラト2世時代に第2宰相にまで昇進し、一時はルメリ・バイレルベイも兼任した。セルビアやビザンツなどバルカン諸国との外交も担当し、チャンダルル・ハリ

ルと同様、融和的な外交政策を進めた [今澤 2013: 72-74]。

上述のように1451年2月、メフメト2世が即位した際、サルジャは第2宰相に就任した。同年春、メフメトがカラマンに遠征した際には、自身に「好意的であった」サルジャをエディルネに残し [Chalkokondyles: 163]、西方の監督を任せたというから [Wittek 1951: 330]<sup>8)</sup>、メフメトとの関係は良好であったようだ。

1452年春、ルメリ・ヒサルの建設が開始されると、サルジャは北側の塔の建設を命じられた [Doukas: 196-197; Bostan 2009: 169-170]。ドゥーカスは、塔の建設を命じられた宰相をハリル、ザガノス、サルジャの順に挙げていることから、この時点でサルジャは第3宰相に降格されていたとも考えられるが、ケマルパシャザーデは、ルメリ・ヒサル塔の建設をハリル、サルジャ、シェハーベッディン、ザガノスの4人の宰相に命じたと記しており [Kemal: 34]、この記載順に従うならサルジャはなお第2宰相であった<sup>9)</sup>。

しかしながら、コンスタンティノーブル包囲中、城内にいた大司教キオスのレオナルドがのちに教皇に宛てた書簡によると、1453年5月25日に行なわれた軍事会議の時、大宰相はハリル、第2宰相はザガノス、第3宰相は宦官長（シェハーベッディン）であったから [Leonard: 31-33]、サルジャはそれ以前に第4宰相になっていたと考えられる。ケマルパシャザーデによるとルメリ・ヒサル建設時にサルジャは第2宰相であったから、それ以降（1452年後半または1453年初）にザガノスが第2宰相となり、それと交替してサルジャが第4宰相に降格されたと考えられる。サルジャはムラト2世時代、ビザンツ皇帝ヨハネス8世（位1425～1448）から、ムラトとの仲介を要請する書簡を受け取っており、ビザンツと友好関係を持っていた [今澤 2013: 73]。したがってサルジャはコンスタンティノーブル包囲に表だって反対しないまでも、積極的に支持していたわけではないと思

われる。このためにザガノスと交替させられたのかもしれない。

サーデッディンによると、コンスタンティノープル包囲の前年、サルジャがエディルネで大砲の鑄造に従事したという [Sadeddin: 419; Bostan 2009: 170]<sup>10)</sup>。

コンスタンティノープル包囲中、サルジャは大宰相ハリルとともに本営に位置した [Kritovoulos: 42; Runciman 1969: 128]<sup>11)</sup>。また、5月29日の最後の総攻撃においてオスマン軍は3つの軍団に分けられ、その一つをサルジャが指揮したとするビザンツ史料も存在する [cf. Philippides & Hanak 2011: 519-520]。

1453年、コンスタンティノープル征服後まもなく、サルジャはハリルやシェハーベッディンとともに宰相から解任されたと推測されているが [Gökbilgin 1952: 248; Babinger & Dölger 1952: 27; Bostan 2009: 170]、オルチのマニサ写本によると、1454年の第1次セルビア遠征後にサルジャが解任され、後任としてマフムート・パシャが任命されたことになっている [Oruç-M: 63b]。ネシュリーやケマルパシャザーデは、サルジャに言及することなく、第1次セルビア遠征後にマフムート・パシャが宰相に任じられたことを記しており [Neşrî-Mz: 183; Neşrî-A: 716; Kemal: 114; Stavrides 2001: 115]、オルチの記述はこれを補完するものである。したがってサルジャは1454年の第1次セルビア遠征後に解任されたと考えて良いであろう。

ほぼ同時期の858年ジュマダー I 月 (1454年4月29日～5月28日)、サルジャはガリポリの建築物に関するワクフを設定しており [Balta 1995: 149]、その後まもなく同地で没したと考えられている。ガリポリにサルジャの廟が現存しているが、没年を示す碑文等は残されていない [Ayverdi 1972: 486-487; Ülkü 2004]。



### 3. イスハク・パシャ（イスハク・ブン・アブドゥッラー）

#### (1) ムラト 2 世時代

この人物はムラト 2 世時代に宰相となったが、前稿では紙幅の関係で割愛したため、ムラト 2 世時代から叙述を行ないたい。

イスハク・パシャは、メフメト 2 世の父ムラト 2 世時代の 845 年シャールバン月上旬（1441 年 12 月 15 日～12 月 24 日）付の文書（temliknâme）の証人として，“İshâq Beg b. ‘Abd Allâh al-khâzin ḥaḍrat Khudâwandgâr” と署名している人物と同一視されており [Schwarz 1981: 54; Uzunçarşılı 1948: 325, n. 1; Gazavat: 93, n. 14]，宮廷で財宝を管理する奴隷であったと考えられる。一説ではギリシア人とされる [Babinger & Dölger 1952: 26, n. 2]。

オスマン朝年代記の一部は、1444 年、ムラトが王位を皇子メフメトに譲った際、シャラブダール・ハムザ・ベイとイスハク・パシャをともなってマニサに隠遁したことを記しており [Oxford Anonymous: 441; Neşrî-Mz: 172; Hasht 2199: 348b; Hasht 2197: 302b]，現在でもこれが受け入れられているが [cf. İnalcık 1954: 79; Babinger 1978: 41]，その一方で、イスハクがその後もエディルネにとどまったことを示す史料記述も存在する。たとえば、オルチのパリ写本では、1446 年春にエディルネで起こったイエニチェリの反乱後、宰相はハリル・パシャ、サルジャ・パシャ、イスハク・パシャ、ルメリ・ベイレルベイはカラジャ・ベイと記されている [Oruç-P: 48a]<sup>12)</sup>。さらに、イスハクがムラトとともにマニサに隠遁したことを記すオックスフォード年代記写本やネシュリーも、1446 年にムラトが復位する以前、ハリル・パシャとイスハク・パシャ（ベイ）がメフメトに対し王位をムラトに譲るよう説得したと記している [Oxford Anonymous: 443; Neşrî-Mz: 173-174]。これもまた、ムラトが復位する以前からイスハ

クがエディルネにとどまっていたことを示唆するように思われる。おそらくは、ムラトがヴァルナで十字軍を破ってエディルネに帰還した際、イスハクをメフメトの宰相につけたのではなかろうか。

いずれにせよ、ムラト復位後イスハクが第3宰相になったことは、1446年9月に作成されたムラトの遺言書に、ハリル、サルジャ、イスハクの順で署名があることから確実である [İnalcık 1954: 102-103; İnalçık 1960b: 613]。オルチによれば、1448年コソヴォの戦い直前でも、この3人が宰相であり [Oruç: 60, 121-122; Oruç-P: 49a]、ムラト2世が没するまで宰相に異同は見られなかった。

## (2) メフメト2世時代

1451年メフメトが再位した際には、上述のように大宰相ハリル、第2宰相サルジャ、そしてイスハクは第3宰相となったが、まもなくムラト2世の遺体を埋葬するためブルサに送られ、代わってシェハーベッディンが第3宰相となった [Kemal: 19; Hasht 2198: 77b; Hasht 2197: 362b; Oruç: 64, 123; Oruç-P: 53a]。

ドゥーカスによると、メフメト2世は即位に際して幼弟アフメトを処刑し、その母親(イスフェンディヤル侯イブラヒム・ベイの娘ハディージェ)を父ムラトの奴隸イスハクと結婚させた [Doukas: 190]。カルココンディラスはこのイスハクがアナドル・ベイレルベイに任命されたというから [Chalkokondyles: 161-163; Jorga 1909: 4-5]、今取り上げているイスハク・パシャと同一人物となろう。

同年春、カラマン侯が反乱を起こすと、アナドル・ベイレルベイのオズグル・オール・イーサー・ベイが解任され、後任にはイスハク・パシャがつけられた [Kemal: 21-22; Oxford Anonymous: 447; Hasht 2198: 94a-94b; Neşri-Mz: 178-179]。その後、メフメトがカラマン遠征を行ない、前

述のように大宰相ハリルの仲裁もあって和平が成立した。

ただしエンヴェリーは、1451年のカラマン遠征後にイスハクがアナドル・ベイレルベイとなり、カラマン侯と共謀したアイドゥン侯とメンテシェ侯を領地から追放したことを記している [Enverî: 48]<sup>13)</sup>。これにもとづいて、イスハクがアナドル・ベイレルベイに任命された時期はカラマン遠征後という指摘もある [Imber 1990: 146]。実際、オスマン朝諸年代記ではカラマン遠征におけるイスハクの行動にはいっさい言及されず、メフメト自らがアナトリア軍を率いたことが記されている。また文書史料でも1451年8月5日の時点でなおオズグル・オールがアナドル・ベイレルベイであったことが確認されるから [Ak & Başar 2003: 22, n. 36]、オズグル・オールが解任され、イスハクが後任のアナドル・ベイレルベイになったのはカラマン遠征後であったと考えられる。

カラマン遠征後、カラマンと共謀したゲルミヤン、アイドゥン、メンテシェ地方の騒乱をおさめたイスハクは、アナドル・ベイレルベイの拠点をアンカラから、ゲルミヤン地方の中心都市キュタヒヤに移し、同地にとどまった [Oxford Anonymous: 447; Kemal: 21-22; Hasht 2198: 95b; Hasht 2197: 367b; Sadeddin: 416]。

1452年春、ルメリ・ヒサル建設が始められると、アナドル・ベイレルベイのイスハクも建設に関わったという [Oruç-P: 53a-53b; Oruç-M: 52b]。

1453年春、コンスタンティノーブル包囲が開始されると、イスハクはのちの大宰相マフムート・パシャも配下にもなって、大城壁中央部のレギオン門から黄金門、マルマラ海までの地域にアナトリア軍を展開した [Kritovoulos: 41-42; Tursun: 40a; Kemal: 50; Stavrides 2001: 112; Philipides & Hanak 2011: 119, n. 103]。

5月29日の総攻撃においてイスハクとマフムートは、射手と砲兵の援護射撃を受けて濠を越え、レギオン門の南の第3軍門あたりの城壁をよじ登

る任務を課せられた。これは総攻撃において最も重要で、かつ最も危険な任務であった [Kritovoulos: 65; Stavrides 2001: 112; Runciman 1969: 128]<sup>14)</sup>。この総攻撃においてイスハクはビザンツの守備隊に撃退され、メフメト2世はこれに憤慨したとされるが、メフメトがアナトリア軍に期待したのは、敵軍の戦力を消耗させることにあったという [Runciman 1969: 136-137]。

1454年春から行なわれた第1次セルビア遠征では、イスハクはやはりアナドル・ベイレルベイとして参加し、メフメトによってシヴリジェ・ヒサル（シヴリジェ・ヒサル）の攻略を命じられている [Kemal: 111-112]<sup>15)</sup>。

1456年7月、アナドル・ベイレルベイのイスハクはベオグラード包囲に参加した。ケマルパシャザーデによると、メフメトは宰相マフムート・パシャに、ウスキュブで鑄造された大砲をベオグラードまで引かせ、イスハクを彼に同行させた [Kemal: 120-121]。総攻撃においてイスハクはアナトリア軍を率いて奮戦したが [Oxford Anonymous: 451-452]、フニャディの反撃にあって戦局は不利となり、ルメリ・ベイレルベイのダユ・カラジャとイエニチェリ軍団長ハサン・アアが戦死し、メフメト自身も負傷して、最終的には撤退することになった<sup>16)</sup>。

オルチによると、ベオグラード包囲後、ルメリ・ベイレルベイ職は宰相マフムートが兼任したが、アナドル・ベイレルベイはなおイスハクであった [Oruç: 72, 124; Oruç-P: 80b-81a; Oruç-M: 64b]<sup>17)</sup>。しかし1458年になるとアナドル・ベイレルベイはシャラブダール・ハムザ・ベイに代わっているため、この時までにはイスハクは解任されていたことになる [Oruç: 72; Oruç-P: 81a; Oruç-M: 65a]。

メフメト2世時代末期に大宰相となるカラマニー・メフメト・パシャが、その前職のニシャンジュであった時期に署名 (Muḥammad b. ‘Ārif al-mawlawī al-tawqī‘ī) を行なったワクフ文書がある。その証人の筆頭として宰相のイスハク・ブン・アブドゥッラー (Ishāq b. ‘Abdullāh al-wazīr) が署

名している [Ayverdi 1968: 19-20]。この宰相が今取り上げているイスハクと同一人物であるなら、アナドル・ベイレルベイ職のあと、再び宰相に任じられたことになる。残念ながら、このワクフ文書の作成年は欠落しているので、このイスハクが宰相となった時期は明らかでない。ただしメフメト・パシャがニシャンジュとなったのは早くとも1465年以降のことであり<sup>18)</sup>、さらにメフメト・パシャがニシャンジュから第2宰相に昇進したのは、トプカプ宮殿博物館文書局所蔵の一文書から、1476年秋であることが確認されるので [Uzunçarşılı 1963: 39, 44; Reindl 1983: 280]、この間の時期においてイスハクが宰相職に就いていたことになろう。宰相から解任された年や没年は知られていない。

#### 4. シェハーベッディン・シャーヒン・パシャ

イナルジクによると、この人物はムラト 1 世時代 (1362～1389) に現れるアルバニア人改宗者であるが [İnalçık 1958: 653]、一方、ムラト 2 世時代のシェハーベッディンは諸年代記で時折「ハードゥム (宦官)」として言及されているので、別人の可能性もある。

シェハーベッディンはムラト 2 世時代に宰相となり、とくにメフメト 2 世の第 1 治世 (1444～1446 年) には第 2 宰相兼ルメリ・ベイレルベイとして大きな権力を振るったが、1446 年春、大宰相ハリルの策謀でイエニチェリが反乱を起こしたあと、失脚した [今澤 2013: 75-76]。同年秋、ムラト 2 世がエディルネで復位すると、シェハーベッディンは皇子メフメトとともにマニサに送られたと考えられている [İnalçık 1960b: 610]。実際、ケマルパシャザーデは、1451 年、皇子メフメトが父ムラトの死を知ると、アタ・ベイであったシェハーベッディンとともにマニサを出発し、ガリポリを経てエディルネに到着したことを記している [Kemal: 2; İnalçık 1954: 103, 110]。

上述のように、1451年2月メフメトが即位した際、大宰相ハリル、第2宰相サルジャ、第3宰相イスハクであったが、その後まもなくイスハクはブルサに送られ、後任としてシェハーベッディンが第3宰相となった〔Kemal: 19〕<sup>19)</sup>。ハリル、サルジャ、イスハクはムラト2世時代からの宰相であったので、若いメフメトとしては、自分の腹心を宰相にするため、イスハクを遠ざけたものと思われる。

同年春、メフメトがカラマン遠征を行ない、カラマン侯と和平を結んだあと、ブルサ近くまでもどると、イエニチェリがメフメトに褒賞を求めて、行く手を阻んだ。トゥラハン・ベイと「ハードゥム・シェハーベッディン・パシャ」がメフメトにこれを伝えて、すべての者を滅ぶべきと進言したというから〔Oxford Anonymous: 447; Neşri-Mz: 179〕、シェハーベッディンはカラマン遠征にも同行していたと考えられる<sup>20)</sup>。

ケマルパシャザーデは、1452年春のルメリ・ヒサル建設に際して、4人の宰相を、ハリル、サルジャ、シェハーベッディン、ザガノスの順に記しているから〔Kemal: 30〕<sup>21)</sup>、この時点でもシェハーベッディンは第3宰相であったことが確認される。

コンスタンティノーブル包囲におけるシェハーベッディンの行動はほとんど不明である。どの軍営にいて、コンスタンティノーブルのどの区域を攻撃したのか、オスマン朝およびビザンツの諸史料はまったく沈黙している。唯一、大司教キオスのレオナルドがのちに教皇に送った書簡には、5月25日の御前会議において大宰相ハリルが和平を主張するのに対して、第2宰相のザガノスと第3宰相の「宦官長」が包囲継続を主張したことが記されている〔Leonard: 31-33〕。この宦官長とはおそらくシェハーベッディンのことであろう。それ以外にシェハーベッディンの行動を示唆する史料は見当たらないから、コンスタンティノーブル包囲戦において、格段の働きを見せたわけではなさそうである。

その後まもなくシェハーベッディンは宰相位から解任され<sup>22)</sup>、フィリベに隠退し、その地で没した [Babinger & Dölger 1952: 27; İnalçık 1954: 135]<sup>23)</sup>。

## 5. ザガノス・パシャ

### (1) ムラト 2 世時代

この人物についてもムラト 2 世時代から検討する。諸史料によると、ザガノスはアルバニア人の改宗者とされる [Tedaldi-M: 4, 5; Tedaldi-P: 161; Jorga 1909: 5; İnalçık 1954: 86; Stavrides 2001: 63; Emecen 2013: 72]<sup>24)</sup>。通説ではデウシルメ出身となっているが [Savvides 2002: 384; Emecen 2013: 72]、確証はない。

ムラト 2 世の宮廷で財宝の管理責任者 (hazinedâr-başı) を務めたあと、843 年ズィルカデ月上旬 (1440 年 4 月 1 ~ 10 日) にアルバニアのサンジャク・ベイとなった [İnalçık 1954: 86]。アルバニア・サンジャクのティマール授与台帳によると、1442 年初までにアルバニアのサンジャク・ベイはハムザ・ベイという人物に交替していた [Arvanid Sancak Defteri: 23, fol. 24a]。

その後、ザガノスがどのような職に就いたかは不明である。次にザガノスが史料に現われるのは、1444 年、ムラトが王位を皇子メフメトに譲った際である。ドゥーカスは、メフメト 2 世の宰相としてハリル、サルジャ、そしてザガノスを挙げる [Doukas: 184]。また、1444 年ないし 1445 年に作成された台帳でもザガノスは宰相として言及される [Paşa Livâsı İcmâl Defteri, XX-XXI, 73, 359]。しかしながらメフメトの第 1 治世の宰相はハリル、シェハーベッディン、サルジャであったから [今澤 2013: 74]、ザガノスは第 4 宰相ということになる。

それにしても、数年前までアルバニアのサンジャク・ベイにすぎなかつ

たザガノスが、なぜ宰相に抜擢されたのであろうか。時期は不明であるが、ムラト2世は娘ファトゥマ・ハトゥンをザガノスと結婚させており [Babinger 1978: 173; Emecen 2013: 72]、有望視していたことが分かる。メフメトは即位する前年の1443年春、マニサの太守に任命されているが、その際、2人のララ、カッサブザーデ・マフムートおよびニシャンジュ・イブラヒムがつけられた [Gazavat: 1b-2a]。このときザガノスも父ムラトより与えられ、メフメトの側近として仕えるようになっていたのではなかろうか。

このあとザガノスはシェハーベッディンとともに若いメフメトを支持し、それを通じて自己の権力拡大を図った。西方との宥和政策を採る大宰相ハリルとことごとく対立し、ハリルの最大の政敵となっていく [İnalcık 1954: 86; Emecen 2013: 72]。1444年、メフメトが即位してまもなく、ハンガリーを中心とした十字軍がドナウ川を渡ってオスマン領内に進軍してきた。これを知ったエディルネ政府は、アナトリアで隠退していたムラトを急いで呼び寄せることになった。こうして十字軍に対して進発する際にも、ムラトとメフメトのどちらが司令官となってオスマン軍を率いるかについて意見が対立した。大宰相ハリルはムラトが司令官になるべきと主張し、それに対してザガノスやシェハーベッディン、イブラヒムらはメフメトを推した。しかし結局は大宰相の意見が通り、ムラトが総司令官となって進発し、ヴァルナにおいて十字軍を撃破した。この戦いではメフメト2世と大宰相ハリルはエディルネに残されたが [今澤 2013: 75]、ザガノスはこの戦いに従軍したという [Jorga 1908: 442]。

このあとムラトは、ハリルの説得にもかかわらず復位せず、ふたたびマニサに隠退した。これはハリルと敵対していたザガノスにとって大きな政治的勝利となった [Emecen 2013: 72]。しかし1446年、ハリルの画策によってムラトが復位すると、ザガノスは失脚した。トゥルスン・ベイは、



ザガノスがマニサでメフメトのアタ・ベイになったと記すが [Tursun: 28 a-28b], ケマルパシャザーデによると1451年, メフメトがマニサからエディルネに向かった際にはシェハーベッディンがアタ・ベイとして同行したという [Kemal: 2]。トゥルスンもケマルパシャザーデも正しいと考えるなら, 当初はザガノスがララとなり, のちにシェハーベッディンと交代したのかもしれない<sup>25)</sup>。

## (2) メフメト 2 世時代

1451年, メフメトが2度目の即位を行なった際, 宰相は前述のように, 大宰相ハ ril, 第2宰相サルジャ, 第3宰相イスハク (まもなくシェハーベッディンと交替) であった。イナルジクはザガノスが第4宰相になったと記すが [İnalçık 1954: 112; İnalçık 1957: 509], それを確証する史料は, 管見の限り存在しない<sup>26)</sup>。しかし1452年, ルメリ・ヒサル建設に際して, メフメトは4人の宰相ハ ril, サルジャ, シェハーベッディン, ザガノスに各工区を割り当てたから (サルジャ・パシャの項参照), この時までにはザガノスが第4宰相になっていたことは確かであろう。ルメリ・ヒサルに残されている856 (1452) 年付の碑文でも「偉大なる宰相 (wazîr al-mu‘azzam) ザガノス・パシャ・ブン・アブドゥッラー」となっており [Ayverdi 1973: 661], 当時ザガノスが宰相であったことが確認される。大宰相ハ ril がコンスタンティノープル征服に反対したのに対し, ザガノスは一貫して征服を主張してメフメトを強力に後押しした。ルメリ・ヒサル建設をメフメト 2 世に提言したのもザガノスであったといわれる [Philipides & Hanak 2011: 399, n. 15]。

1453年4月に始められたコンスタンティノープル包囲でザガノスは, 金角湾を挟んだベラ (ガラタ) 地区に布陣し, 北側の城壁を担当した [Kritovoulos: 41; Chalkokondyles: 163; Runciman 1969: 94; Emecen 2013: 72]。

コンスタンティノーブル包囲中、御前会議が数回開かれ、そのたびにハリルが和平を、ザガノスが包囲継続を主張して譲らなかったことは、上述のとおりである。包囲終盤の5月25日に開かれた御前会議の様子は、大宰相ハリルを通じてビザンツ側に伝わり、当時城内にいた人々の手で書き残されている。その中でとくに、大司教キオスのレオナルドが、コンスタンティノーブル陥落後の8月16日に教皇ニコラウス5世宛てに書かれた書簡では、この軍事会議においてザガノスは第2宰相であったと記されており [Leonard: 31-33; İnalçık 1960a: 414; Imber 1990: 153]、おそらく、包囲戦の始まる1453年春までに、サルジャと交替する形で第4宰相から第2宰相に昇進していたと考えられる。

コンスタンティノーブル包囲におけるザガノスの活躍は、城内のビザンツ側にも伝わっていたようである。当時、城壁の守備についていたテダルディによると、ザガノスは大きな権力を有し、包囲戦における有名な作戦（たとえば、ペラとコンスタンティノーブルをつなぐため金角湾に浮き橋をつくったこと、オスマン艦隊を陸揚げして金角湾に入れたこと、城壁の下に坑道を掘ったこと、城壁より高い木塔をつくったことなど）はすべてザガノスの発案とされている。さらに、5月29日の総攻撃もザガノスが立てた計画にもとづくものと記している [Tedaldi-M: 4, 5; Tedaldi-P: 143-145, 161-163, 167-169, 179]。

この総攻撃でザガノスはペラから浮き橋を通してコンスタンティノーブル北側の城壁を攻撃した [Kritovoulos: 65, 68; Tedaldi-M: 7; Tedaldi-P: 181; Barbaro: 66-67]。また、降伏を申し出たペラ地区にも入城して秩序をただし [Kritovoulos: 76; Doukas: 230; Chalkokondyles: 203]、6月1日にはペラ住民の生命・財産の保障と交易の自由を約束する勅令 (aman-nâme) にザガノスが署名している [İnalçık 1960a: 414; Babinger 1978: 101-102]。

コンスタンティノープル征服の翌日、大宰相ハリルは逮捕され、その後まもなく処刑された。定説では、ハリルに代わって宮廷奴隷のザガノスが  
大宰相に任命されたと考えられている [İnalcık 1954: 134-135; İnalcık 1960a: 413-415; Stavrides 2001: 63; Savvides 2002: 384; Emecen 2013: 73]<sup>27)</sup>。それ以降もスルタンの奴隷を多く大宰相に就けることによって、メフメト 2 世は権力を強化したとされる。こうしたことから、この1453年はオスマン朝宰相制の画期とみなされている [Stavrides 2001: 66-70; İnalcık 2002: 195; Imber 2002: 162-164]。ただし、この見解には若干の留保が必要であろう。というのは、当初メフメトはハリルに代えて、ザガノスではなく、自身のホジャであったウレマー階層のモッラー・ギュラーニーに宰相就任を要請したとする逸話が残されているからである。しかしギュラーニーはそれを拒否して、「宮廷に仕える従僕たちが、御前会議の主宰者の座 (şadr-i dīvān-i hümayūn, つまり大宰相職) につくことを切望し、日夜、誠心誠意仕えている。それにもかかわらず、宰相の地位をそれ以外の者に与えると、彼らは傷つき、奉仕において弛緩が生じるので、宰相職を宮廷奴隷に与えるべきである」という趣旨の提言を行なった。これを受け入れたメフメトは、その代わりにギュラーニーにカザスケル職を与えたという [Mecdi: 103-104]。

コンスタンティノープル征服後、大宰相ハリルが解任・処刑された際、その息子スレイマンもカザスケル職から解任された [Uzunçarşılı 1974: 95]。ギュラーニーはチャンドルル・スレイマンの後任としてカザスケルに就任したので<sup>28)</sup>、メフメトがギュラーニーに宰相（おそらく大宰相）就任を要請したのも、コンスタンティノープル征服後のことと考えられる [Repp 1986: 169-170]。この逸話が事実を反映したものなら、メフメトはギュラーニーの意見を容れて宮廷奴隷のザガノスを大宰相に任命したわけであるから、メフメトが大宰相に宮廷奴隷をつけて権力を強化したというのは

自身の意図ではなく、なおウレマー階層の人間を大宰相につけようとしていたことになる。

オスマン朝諸年代記は、大宰相時代のザガノスについてほとんど言及しない。オルチのマニサ写本は、858 (1454) 年にザガノスがメッカ巡礼を行なったこと、859 (1455) 年にセルビアの重要な鉱山都市ノヴォ・ブルドを征服したことを記しているが [Oruç-M: 63b-64a]、大宰相であることには言及がない。唯一ケマルパシャザーデが、1456年のベオグラード遠征においてザガノスを大宰相 (vezîr-i a'zam) として言及する。この遠征においてザガノスはメフメトの命を受けて、ドナウ河畔でオスマン艦隊を艤装し、ソフィア・サンジャク・ベイのアフメトを艦隊司令官に任命した。また、ルメリ・ベイレルベイのダユ・カラジャに陸から艦隊を援護させた [Kemal: 122-123]。しかし、ベオグラード城砦を包囲していたこの艦隊はハンガリー艦隊に撃破され、これが最終的にオスマン軍の退却を招いた [Babinger 1978: 140-141]。ザガノスはその責任を取らされて同年、大宰相から解任され (後任はマフムート・パシャ)、バルケシルに追放されたと考えられている [İnalçık 1960a: 415; İnalçık 1957: 512; Stavrides 2001: 63-64]<sup>29)</sup>。

しかしまもなくザガノスは赦されてガリポリ・サンジャク・ベイとなったようである。クリトブロスによると1459年冬、メフメトは、ガリポリ・サンジャク・ベイで海軍提督のザガノスを40隻の船とともに、エーゲ海諸島に派遣し、タソス島とサモトラケ島を征服させた [Kritovoulos: 148; Chalkokondyles: 317]。クリトブロスは、その前年の1458年秋、海軍提督イスマイルによるレスボス島遠征に言及している [Kritovoulos: 138-139]。その後、1459年冬、メフメトはイスタンブルに来て、兵士や高官の論功行賞を行なっているから [Kritovoulos: 147-148]、その際に、イスマイルに代わってザガノスがガリポリ・サンジャク・ベイ (かつ海軍提督) に任命

されたのかもしれない<sup>30)</sup>。

ザガノスはガリポリ・サンジャク・ベイの時代に、エーゲ海を荒らし回っていた海賊を退治して名を揚げ、1460年にはテッサリアとモレアのサンジャク・ベイに任命された [Chalkokondyles: 319]。メフメト 2 世の第 2 次モレア遠征では、軍を率いてモレア北西部の諸城を征服した。その際の住民に対する残虐行為のため解任されたが、まもなく再任された [Chalkokondyles: 329-339; Babinger 1978: 173, 176-177; Savvides 2002: 384; Emecen 2013: 73]。翌61年にはメフメト 2 世のトラブゾン遠征にも参加したとされる [Berki 1960: 27; Emecen 2013: 73]。

1463年にはマケドニア地方のサンジャク・ベイに任命され、この時期、スルタンからトラブゾン皇帝の娘アンナが与えられたという [Chalkokondyles: 415-417; Jorga 1909: 104; Savvides 2002: 384; Emecen 2013: 73]。さらに同年秋、大宰相マフムート・パシャがモレアに遠征すると、再びモレアのサンジャク・ベイに任命されていたザガノスをアカイア地方に派遣した [Chalkokondyles: 473]。

またバルケシルにジャーミーをはじめとする建築群を残し、その一部（イマーレット）に関しては866年ジュマダー I 月上旬（1462年 2 月）付のワクフ文書（写し）が現存している [Berki 1960: 25; Ayverdi 1973: 60; Çobanoğlu & Erzincan 2013: 73-74]。1464年以降に没し、バルケシルに埋葬された [Savvides 2002: 384; Emecen 2013: 73]<sup>31)</sup>。

## 6. ニシャンジュ・イブラヒム

この人物は、866年レジェブ月下旬（1462年 4 月下旬）付のワクフ文書において、“munshī’ al-mabarrāt ... iftikhār al-‘ulamā’ wa al-akābir ... Tāj al-Milla wa al-Ḥaqq wa al-Dīn Ibrāhīm Pasha b. ‘Abd Allāh” として言及されるので、宮廷奴隸でウレマー職のニシャンジュを務めていたことが分かる

[İnalçık 1954: 112, n. 195; Gazavat: 79, n. 3; Ayverdi 1973: 209]。

1443年春、ムラト2世は皇子メフメトをマニサの太守として派遣した際、カッサブ・ザーデ・マフムートとニシャンジュ・イブラヒムをララにつけた [Gazavat: 1-2, f. 1b-2a; İnalçık 1954: 55]。

明確な史料記述はないが、イブラヒムは1444年、メフメトが即位した際に側近としてエディルネに付き従い、ヴァルナの戦いでムラトとメフメトのどちらが指揮官になるかという議論において、イブラヒムはザガノスとともにメフメトを支持したとされる [İnalçık 1954: 74, 80]。しかしながら大宰相ハリルとの抗争に敗れ、1446年、ムラト2世が復位した際には、イブラヒムはメフメトとともにマニサに送られた [Oxford Anonymous: 443; Neşrî-Mz: 174]。

ドゥーカスによると1451年、メフメトが再位した際、宰相の一人としてイブラヒムの名が挙げられるが [Doukas: 188]、それ以降コンスタンティノープル征服にいたるまで諸史料でいっさい言及されない。イナルジクが推測するように、イブラヒムはニシャンジュとして御前会議の一員となったのかもしれない [İnalçık 1954: 112, n. 196]。

ヒュサメッディンによると、チャンダルル・ハリルが解任されたあと、イブラヒムがニシャンジュから第2宰相に昇進したが、1454年には失脚したという [Hüsameddin 1927: 221-222]。しかしながらオルチのマニサ写本には、1455年の時点でイブラヒムとマフムートが宰相であったことが記されている [Oruç-M: 63b]。この時期、大宰相はザガノスであったと考えられているから、記載順序に従うと、第2宰相イブラヒム、第3宰相マフムートということになる。以前検討したように、ムラト2世時代において少なくとも宰相の一人はウレマー階層の人間であったから [今澤 2013: 78]、メフメト2世がチャンダルル・ハリルを解任したあと、ウレマーであるイブラヒムを宰相に加えたと考えられる。

本項冒頭で記したように、イブラヒムは866年レジェブ月下旬（1462年4月下旬）付のワクフ文書を作成しているから、この時点では生存していたことが確認される [İnalçık 1954: 135, n. 315]。

## 7. アフメト・パシャ

この人物は、高名なトルコ語詩人として、オスマン朝文学史においても重要な地位を占めている。父ヴェリユッディン Veliyüddin b. İlyas Hüseyinî はムラト 2 世時代にメドレセ教授、エディルネのカーディー、カザスケル等を歴任した [今澤 1995: 5]。この家系は、アリーの次子フサインの子孫（サイイド）とされる [Taşköprüzade: 200; Köprülü 1941: 188]。ムラト 2 世時代初期の830（1426/27）年頃、エディルネで誕生したアフメトは、当時のウレマーに学んだあと、ブルサのムラディエ・メドレセの教授となった [Taşköprüzade: 200; Mecdî: 217]。

1451年、メフメト 2 世即位後、モッラー・ヒュスレウに代わってエディルネのカーディーとなり、まもなくカザスケルに昇進した。その後アフメトはメフメト 2 世のホジャとなった [Taşköprüzade: 200; Mecdî: 217; Köprülü 1941: 188; İnalçık 1960c: 292; Repp 1986: 164]。857年サフェル月（1453年2～3月）付の文書に、チャンドルル・スレイマン（ハ ril の息子）がカザスケルとして署名しているので [Uzunçarşılı 1974: 94]、アフメトがホジャとなったのは、それ以前のことと考えられる。

アフメトはホジャとしてコンスタンティノーブル包囲に参加した。包囲が長引いていることに思い悩んだメフメトは、精神的支柱のアクシェムセッディンに、いつ征服が実現するのかを問い合わせるため、アフメト・パシャを派遣している [Hasht 2198: 106b-107a (margin); Hasht 2197: 371b; Kemal: 61-62; Taşköprüzade: 228; Mecdî: 242-243]。またコンスタンティノーブルが征服された時には、メフメトのそば近くに控えていたこ

とも伝えられている [Taşköprüzade: 228-229; Mecdi: 243]。オルチのマニサ写本によると、858 (1454) 年の時点でアフメト・パシャはなおホジャであった [Oruç-M: 63b]。

その後まもなくアフメト・パシャは宰相に任じられた [Âşık Çelebi: 287; Taşköprüzade: 200; Mecdi: 218]。おそらくウレマー階層のニシャンジュ・イブラヒムの後任であろう。ドゥーカスは1455年秋、ブルガリアのイズラディにメフメトを訪問した。その際、宰相のマフムート・パシャとアフメト・パシャに謁見している [Doukas: 251]<sup>32)</sup>。当時、大宰相はザガノスであったので、マフムートが第2宰相、そしてアフメト・パシャが第3宰相であったと思われる。1456年のベオグラード遠征においても宰相として言及されるので [Kemal: 121]、おそらく第3宰相として同行したのである。オルチは、ベオグラード遠征で戦死したルメリ・ベイレルベイのダユ・カラジャの後任として、宰相マフムートにこの職を兼任させたことを述べ、続けて、その他の宰相がザガノスとヴェリュッディンの息子アフメト・パシャであったことを記しているので [Oruç: 72; Oruç-P: 80b-81a; Oruç-M: 64b]、その後しばらく宰相にとどまったものと推察される。

しかしその後、突如解任されることになる [Âşık Çelebi: 287-288]。その時期は不明であるが、ミハイロヴィチがオスマン朝に仕えるようになった1450年代末には、すでに宰相はマフムートとイスハクの2人のみであったと記されているので [Mihailović: 157]、アフメト・パシャはそれまでには失脚していたことになる。

その後、アフメト・パシャはブルサに移り住んでオルハン・メドレセとムラディエ・メドレセのワクフ管財人の職が与えられ、のちにはスルタン・オニユ、ティレ、アンカラのサンジャク・ベイを歴任した。バヤズィト2世時代にはブルサのサンジャク・ベイに任じられ、1488年にはマムルーク朝との戦いに参加したという [Âşık Çelebi: 287-288; Taşköprüzade:



200; Mecdi:218; Köprülü 1941: 188; İnalçık 1960c: 292; Kut 1989:111]。

902 (1496/97) 年、アフメト・パシャはブルサで没し、ムラディエ・メドレセ近くのテュルベに埋葬された [Âşık Çelebi: 290; Köprülü 1941: 188; İnalçık 1960c:292; Ayverdi 1973: 117-118; Kut 1989: 111]。

## おわりに

以上、メフメト 2 世時代初期の宰相たちについて検討してきた。簡単に整理しておきたい。

1451年、メフメトが 2 度目の即位を果たした際、それまでの慣習に従って先代の宰相たちを引き継いだ。つまり大宰相チャンドルル・ハリル、第 2 宰相サルジャ、第 3 宰相イスハクであったが、イスハクはまもなく、メフメトのアタ・ベイであったシェハーベッディンと交替し、のちにアナドル・ベイレルベイとなった。

1452年、ルメリ・ヒサル建設時には、この 3 人の宰相に加えて、やはりメフメトの側近であったザガノスが第 4 宰相として現れる。その後ザガノスはおそらく、1453年のコンスタンティノーブル包囲時までにはサルジャと交替して第 2 宰相となり、ハリルが包囲中止を訴える中、一貫して包囲継続を主張し、メフメトを強力に後押しした。

コンスタンティノーブル征服後、ムラト 2 世時代からの宰相であったチャンドルル・ハリルは排除され、サルジャとシェハーベッディンもその後まもなく引退し、代わってメフメト 2 世子飼いの側近たち（皇子時代にマニサで仕えていた宮廷奴隷）が大宰相や宰相に引き立てられていくことになる。その最初がザガノス・パシャであったと思われるが、彼の太宰相時代の行動は、ベオグラード包囲戦を除いて諸史料でほとんど言及されない。わずか数年で解任されたことから見ても、奴隷の宰相としてそれほど機能しなかったようである。また従来、メフメト 2 世がチャンドルル・ハ

リル解任後、ザガノスをはじめ宮廷奴隷の多くを大宰相の地位につけることで自己の権力強化を図ったとされるが、当初メフメトにはそうした意図はなく、ハリルに代わってやはりウレマー階層のモッラー・ギュラーニーを大宰相につけようとしていたことも窺われる。

この時期、大宰相以外の宰相として第2宰相ニシャンジュ・イブラヒム、第3宰相マフムート・パシャがいたが、1455年頃ニシャンジュ・イブラヒムが解任され、マフムートが第2宰相となり、後任として第3宰相にアフメト・パシャが任命されたと考えられる。

なお、ザガノスはデウシルメ出身としては初の大宰相とされるが、大宰相から解任されたあと、ガリポリ、モレア、マケドニア等のサンジャク・ベイを歴任した。「スルタンの奴隷」としてスルタンの意のままに処刑された、のちの大宰相たちとは性格を異にしていたように思われる。

#### 註

- 1) Hasht 2198: 77b. この写本はバヤズィト2世時代に成立したが、セリム1世時代に修正が加えられた Hasht 2197: 362b では、ハリル、イスハク、サルジャの順に記されている。
- 2) オルチの他の2写本も、メフメト2世即位当初の宰相として（記載順序に異同はあるが）ハリル、サルジャ、イスハク、シェハーベッディンを挙げている [Oruç: 123; Oruç-M: 51b-52a]。
- 3) なおイナルジクは、メフメト2世即位当初の宰相として、大宰相ハリル、第2宰相にはシェハーベッディン、第3宰相がサルジャ、そして第4宰相にはザガノスが任命されたとするが、その史料的根拠は示されていない [İnalçık 1954: 111-113; İnalçık 1957: 509; İnalçık 2003: 397]。
- 4) ルメリ・ヒサルは1452年4月15日～8月31日に建設された [Runciman 1969: 66; Ayverdi 1973: 630-631; Babinger 1978: 76]。
- 5) Kir Luka が「ノタラス公」を意味することについては、Phillipides & Hanak 2011: 122 参照。Kir/Chir (κύρ) は Kyrios (κύριος) の短縮形 [Philippides 2007: 115, n. 16; 三浦・平野 2014: 143, n. 63]。

- 6) ハリルが「異教徒の仲間」であり、賄賂を好んだとするのはハリルの反対派による策謀で、それがビザンツ史料にも反映されたとする見解もある [İnalçık 1954: 81-82; Uzunçarşılı 1974: 82-83, 90]。
- 7) ハリルの処刑時期については諸説ある。cf. Phillipides & Hanak 2011: 484, n. 37.
- 8) ただし、オルチのマニサ写本によると、宰相のハリル、サルジャ、シェハーベッディンがカラマン遠征に参加したことになる [Oruç-M: 52a]。
- 9) オルチのオックスフォード写本でも、メフメトがルメリ・ヒサル建設を 4 人の宰相に割り当てたことが記されているが、宰相の名前には言及されず、また同史料のパリ写本では宰相はハリル、サルジャ、シェハーベッディン（マニサ写本ではザガノス）の 3 人となっている [Oruç: 65; Oruç-P: 53b; Oruç-M: 52b]。
- 10) カルココンディラスは、1453 年春サルジャが大砲をエディルネからコンスタンティノーブルに運んだことを記しているが、その際、この人物がルメリ・ベイレルベイでルメリ軍を率いたことも併記されている [Chalkokondyles: 173]。当時ルメリ・ベイレルベイであったのはダユ・カラジャなので、おそらくカルココンディラスが「カラジャ」と「サルジャ」を取り違えたのであろう。
- 11) クリトブロスは、スルタンが 2 人のパシャであるハリルと「カラジャ」とともに、大城壁の中央部分を引き受けたことを記しているが、これも「サルジャ」の誤りであろう。実際、その後、総攻撃に移る際、メフメトが本営にいたハリルと「サルジャ」に語りかけている [Kritovoulos: 65]。
- 12) 同史料は、この直前エディルネで大火災が発生した 849 (1445) 年の時点で、宰相がハリル、カスム、サルジャ、ルメリ・ベイレルベイがシェハーベッディンであったと記している。おそらくイエニチェリ反乱の前後で宰相（カスムからイスハクへ）やルメリ・ベイレルベイ（シェハーベッディンからカラジャへ）が交替したのであろう。なおマニサ写本はエディルネの火災以降、ムラト 2 世の死に至るまで、数葉欠落している [cf. Oruç-M: 50b-51a]。
- 13) ケマルパシャザーデも、イスハクがアナドル・ベイレルベイに任命された時期をカラマン遠征後としている [cf. Kemal: 21]。
- 14) 当時、コンスタンティノーブル城内で防衛軍に参加していたフィレンツェ

- 商人のテダルディによると、〔アナドル・〕ベイレルベイ (Biglardi) は第3軍門の近くのペーゲー門に布陣した [Tedaldi-M: 7; Tedaldi-P: 181]。
- 15) ただし一部のオスマン朝諸年代記では、シヴリジェ・ヒサルはメフメト自らから征服したことになっている [Oruç-P: 80a; Oruç-M: 63b; Oxford Anonymous: 450; Hasht 2198: 123b; Hasht 2197: 385b]。
- 16) ベオグラード包囲戦については, Babinger 1978: 138-144; Pálosfalvi 2018: 174-187 に詳しい。
- 17) イナルジクによると、ベオグラード包囲後の861 (1456/57) 年付のワクフ文書で、証人として署名している “Melik-ül ümera il ‘izâm Cemaleddin İshak bey bin Abdullah” は別人のイスハクとされるが [İnalçık 1954: 83-84, n. 67], “Melik-ül ümera” という称号はベイレルベイを示しているから、今取り上げているイスハクと同一人物と考えて良いのではなからうか。
- 18) バヤズィト2世時代初頭に第2宰相となったカスム・パシヤの父親メフメト・ジェゼリー Mehmed Cezerî は, 869 (1464/65) 年, ニシャンジュになったとされるので [Orhonlu 1978: 722], カラマニー・メフメト・パシヤがニシャンジュ職についたのはその時期以降となる。
- 19) イナルジクは、シェハーベッディンがこの時、第2宰相になったとするが [İnalçık 1954: 111-113; İnalçık 1957: 509; İnalçık 2003: 397], その史料の根拠は不明である。
- 20) オルチのマニサ写本も、シェハーベッディンがこの遠征に参加したことを記している [Oruç-M: 52a]。
- 21) オルチのパリ写本も、ルメリ・ヒサルの建設に参加した宰相として、ハリル, サルジャ, ハードゥム・シェハーベッディン・パシヤの名を挙げている [Oruç-P: 53a-53b]。オルチのマニサ写本では、この時の宰相として、ハリル, サルジャ, ザガノスを挙げている [Oruç-M: 52b]。
- 22) イスタンブル征服後、メフメト2世はこの都市をオスマン朝の首都にふさわしいように復興させていった。その一環として各地から住民を強制的に移住させ、家屋の私有を認めたが、その後（遅くとも1454年までに）賃貸料 (mukāta'a) を課すようになった。アシュクパシャザーデによると、住民の間でこれに対する反発が起こり、Kavala Şâhîn というメフメト2世の父祖の代から宰相を務めていた従僕 (kul) がその廃止を進言して、メフメトもこ

れを受け入れた [Âşık-G: 133; Âşık-Ö: 228b-229b]。イナルジクはこの人物を今取り上げているシェハーベッディンと同定し、1457年までには宰相から解任されたと推測している [İnalçık 1969/70: 241-243]。その場合、シェハーベッディンは1453年のコンスタンティノープル征服後もしばらく宰相位にとどまったことになる。

- 23) シェハーベッディンは各地で多くの建設事業を行なったことで知られるが、とくにフィリベにはジャーミー、メドレセ、ベデスタン、ハمام、キャラヴァンサライ、テュルペなどから成る複合施設（キュッリエ）がつくられ、フィリベの発展に大きく寄与した [Ayverdi 1972: 479-485; Kiel 1996: 80]。
- 24) 出自については諸説あり、最近では、名前の特有性からジプシー出身説も出されている [Phillipides & Hanak 2011: 118-119, n. 100]。
- 25) なお、一部のオスマン朝年代記は、この時ザガノスはアタ・ベイには任命されず、バルケシルに引退させられたことを記す [Oxford Anonymous: 443; Neşrî-Mz: 174]。これにもとづいて、ザガノスは1446年にバルケシルに追放され1451年メフメトが再位した際エディルネに呼び出されたとする説 [Berki 1960: 27] や、ザガノスはいったんバルケシルに引退したが、まもなくマニサに召し出され皇子メフメトに仕えるようになったとする説 [Emecen 2013: 72] などもある。
- 26) エメジェンも、1451年メフメトが即位した際、ザガノスが宰相に任命され、その後のカラマン遠征にも同行したとするが [Emecen 2013: 72]、それを示す史料は見当たらない。
- 27) ただし、ハリルの後任としてザガノスが大宰相になったことを示すオスマン朝史料は、管見の限り存在しない。唯一、ビザンツ史料のカルココンディラス史のみが「ハリルの逮捕後、スルタンの一族であったザガノスが卓越した地位に昇り、スルタンのそばで権力を掌握した」と記し、ハリルの後任となったことを示唆している [Chalkokondyles: 209]。なお、時期は不明であるが、ザガノスは娘をメフメト 2 世に与えて義父にもなった [İnalçık 1954: 128, n. 273; Stavrides 2001: 63; Emecen 2013: 73]。

ヒュサメッディンはハリル解任後、大宰相には第 2 宰相であった Bergosı Halil Paşa b. Ahmedî なる人物が任命されたとしている [Hüsameddin 1927: 221-222]。

- 28) 実際、858年レビー I 月下旬（1454年3月21日～3月30日）付の文書に、ギュラーニーがカザスケルとして署名している [cf. Gökbilgin 1952: 349]。
- 29) ただしオルチによると、ベオグラード遠征後もザガノスはなお宰相として言及されている [cf. Oruç: 72, 124; Oruç-P: 80b-81a; Oruç-M: 64b]。これが正しければ、ザガノスはなおしばらく宰相としてとどまった可能性がある。
- 30) Savvides によると、1459年10月、ザガノスはイスマイル・パシャを継いで、海軍提督 (kapudan-i deryâ) となり、艦隊を率いてサモトラケ島とタソス島のラテン人艦隊を攻撃したという [Savvides 2002: 384]。
- 31) バルケシルに残るザガノス廟の碑文によると、865 (1460/61) 年に死去したことになるが、この碑文は20世紀初めになってザガノスの子孫によって設置されたものであり、信頼できないという [Eren 1994: 41]。ただし、866年付のワクフ文書ではザガノスが故人となっている。（この文書が写しであるためとも考えられるが）この文書を初めて取り上げた Berki によると、この時点でザガノスは亡くなっており、その遺族によってワクフ文書が作成されたとする [Berki 1960: 28-29]。もしこれが事実であれば、墓碑の865年はやはり正しいのかもしれない。その場合、マケドニアのサンジャク・ベイ以降のザガノスは別人ということになるう。
- 32) ドゥーカスの書の英訳では “Said Ahmad Pasha” と表記されているが、ギリシア語原文では “Σειτή Ἀχματ πασία (Seiti Akhmat Pasia)” となっているから (Ducae, *Historia Byzantina*, ed. I. Bekker, Bonn, 1834, 330; cf. Stavrides 2001: 114), “Said” の部分は “Seyyid” と改めるべきであろう。前述のようにアフメト・パシャはサイイドの家系であったので、この人物は今取り上げているアフメトと同一人物と考えられる。

#### 参考文献

##### (史料)

- Arvanid Sancak Defteri: *Hicrî 835 tarihli sûret-i defter-i sancak-i Arvanid*, (ed.) H. İnalçık, Ankara, 1954; 2nd ed., Ankara, 1987.
- Âşık-G: *Die altosmanische Chronik des 'Âşikpaşazâde*, (ed.) F. Giese, Leipzig, 1929.
- Âşık-Ö: *Âşıkpaşazâde Tarihi [Osmanlı Tarihi (1285-1502)]*, (ed.) N. Öztürk, İstanbul: Bilge Kültür Sanat, 2013.

- Âşık Çelebi: Âşık Çelebi, *Meşâ'irü's-Su'arâ: İnceleme—Metin*, Vol. 1, (ed.) F. Kılıç, İstanbul: İstanbul Araştırmaları Enstitüsü, 2010.
- Barbaro: Nicolò Barbaro, *Diary of the Siege of Constantinople 1453*, (tr.) J. R. Jones, New York: Exposition Press, 1969.
- Chalkokondyles: Laonikos Chalkokondyles, *The Histories*, (tr.) A. Kaldellis, Vol. 2, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2014.
- Doukas: *Decline and Fall of Byzantium to the Ottoman Turks*, by Doukas, (tr.) H. J. Magoulias, Detroit: Wayne State University Press, 1975.
- Enverî: *Fatih Devri Kaynaklarından Düstûrnâme-i Enverî: Osmanlı Tarihi Kısmı (1299–1466)*, (ed.) Necdet Öztürk, İstanbul: Kitabevi, 2003.
- Gazavat: H. İnalçık & M. Oğuz (eds.), *Gazavât-ı Sultân Murâd b. Mehmed Hân : İzladı ve Varna Savaşları (1443–1444) Üzerinde Anonim Gazavâtnâme*, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 1978.
- Hasht 2197: İdrîs Bidlîs, *Hasht Bihisht*, MS. Süleymaniye Kütüphânesi, Esad Efendi 2197.
- Hasht 2198: İdrîs Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, MS. Süleymaniye Kütüphânesi, Esad Efendi 2198.
- Hasht 2199: İdrîs Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, MS. Süleymaniye Kütüphânesi, Esad Efendi 2199.
- Kemal: İbn Kemal, *Tevârih-i Âl-i Osman*, VII. Defter, (ed.) Ş. Turan, Vol. 1, Ankara, 1954.
- Kritovoulos: Kritovoulos, *History of Mehmed the Conqueror*, (tr.) C. T. Riggs, New Jersey: Princeton University Press, 1954; reprint, Greenwood Press, Westport, Connecticut, 1970.
- Leonard: J. R. Melville Jones (tr.), *The Siege of Constantinople 1453: Seven Contemporary Accounts*, Amsterdam: Adolf M. Hakkert, 1972, 11–41.
- Mecdî: Mecdî Mehmed Efendi, *Hadâ'iku's-Şakâ'ik*, (ed.) A. Özcan, İstanbul, 1989.
- Neşrî-A: Mehmed Neşrî, *Kitâb-ı Cihan-nümâ*, (ed.) F. R. Unat & M. A. Köymen, 2 vols., Ankara, 1949.
- Neşrî-Mz: *Ğihânnümâ: Die altosmanische Chronik des Mevlânâ Mehmed Neschrî*, Band I: Einleitung und Text des Cod. Menzel, (ed.) F. Taeschner,

- Leipzig, 1951.
- Oruç: *Die frühosmanischen Jahrbücher des Urudsch*, (ed.) Fr. Babinger, Hannover, 1925.
- Oruç-P: *Oruç Beğ Tarihi* [*Osmanlı Tarihi (1288-1502)*], (ed.) N. Öztürk, İstanbul: Bilge Kültür Sanat, 2014.
- Oruç-M: Oruç b. Âdil, *Tevârih-i Âl-i Osman*, MS. Manisa Genel Kütüphânesi, Muradiye 5506/2.
- Oxford Anonymous: H. E. Cengiz & Y. Yücel (eds.), “Rûhî Târîhi” *Belgeler (Türk Tarih Belgeleri Dergisi)*, XIV-18 (1989-1992): 359-472.
- Paşa Livâsı İcmâl Defteri: *1445 Tarihli Paşa Livâsı İcmâl Defteri*, (eds.) H. İnalçık, E. Radushev, and U. Altuğ, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2013.
- Sadeddin: Sadeddin, *Tâc üt-Tevârih*, Vol. 1, İstanbul, 1280 H.
- Siege: J. R. Melville Jones (tr.), *The Siege of Constantinople 1453: Seven Contemporary Accounts*, Amsterdam: Adolf M. Hakkert, 1972.
- Sphrantzes: *The Fall of the Byzantine Empire: A Chronicle by George Sphrantzes, 1401-1477*, (tr.) M. Philippides, Amherst: The University of Massachusetts Press, 1980.
- Taşköprüzâde: Taşköprülülüzâde, *Eş-Şekâ'iku n-Nu'māniye fî 'Ulemâ'i d-Devleti l-'Osmāniye*, (ed.) A. S. Furat, İstanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Basımevi, 1985.
- Tedaldi-M: J. R. Melville Jones (tr.), *The Siege of Constantinople 1453: Seven Contemporary Accounts*, Amsterdam: Adolf M. Hakkert, 1972, 1-10.
- Tedaldi-P: M. Philippides, *Mehmed II the Conqueror and the Fall of the Franco-Byzantine Levant to the Ottoman Turks: Some Western Views and Testimonies*, Arizona: Arizona State University, 2007, 133-217.

〈研究〉

- Ak, Mahmut & Başar, Fahameddin 2003: *İstanbul'un Fetih Günlüğü*, İstanbul: Tattav.
- Ayverdi, Ekrem Hakkı 1968: “Gaazî Süleyman Paşa Vakfiyesi ve Tahrîr Defterleri” *Vakıflar Dergisi* 7, 19-28.



- Ayverdi, Ekrem Hakkı 1972: *Osmanlı mi'mârisinde Çelebi ve II. Sultan Murad devri, 806-855 (1403-1451)*, İstanbul: İstanbul Fetih Cemiyeti.
- Ayverdi, Ekrem Hakkı 1973: *Osmanlı Mi'mârisinde Fâtih Devri*, İstanbul: İstanbul Fetih Cemiyeti.
- Babinger, Franz 1978: *Mehmed the Conqueror and his Time*, (ed.) W. C. Hickman, (tr.) R. Manheim, New Jersey: Princeton University Press.
- Babinger, Franz & Dölger, F 1952: "Ein Auslandsbrief des Kaisers Johannes VIII. vom Jahre 1447" *Byzantinische Zeitschrift* 45, 20-28.
- Balta, Evangelia 1995: *Les vakıfs de Serrès et de sa region (XVe et XVIe s.)*, Athènes.
- Berki, Ali Himmet 1960: "İslâm'da Vakıf: Zağanos Paşa ve Zevcesi Nefise Hatun Vakfiyeleri" *Vakıflar Dergisi* 4, 19-37.
- Bostan, İdris 2009: "Saruca Paşa" *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 36, 169-170.
- Çobanoğlu, Ahmet Vefa & Erzincan, Tuğba 2013: "Zağanos Paşa Külliyesi" *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 44, İstanbul, 73-75.
- Emecen, Feridun 2013: "Zağanos Paşa" *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 44, İstanbul, 72-73.
- Eren, Muharrem 1994: *Zağanos Paşa*, Balıkesir: Zağnos Kültür ve Eğitim Vakfı.
- Gökbilgin, M. Tayyib 1952: *XV-XVI. asırlarda Edirne ve Paşa Livâsı*, İstanbul.
- Hüsameddin, Hüseyin 1927: *Amasya Tarihi*, Vol. 3, İstanbul.
- Imber, Colin 1990: *The Ottoman empire 1300-1481*, İstanbul: Isis.
- Imber, Colin 2002: *The Ottoman Empire, 1300-1650: The Structure of Power*, Hampshire & New York: Palgrave Macmillan.
- İnalcık, Halil 1954: *Fatih Devri Üzerinde Tetkikler ve Vesikalar I*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi, 1954; 2nd ed., Ankara, 1987.
- İnalcık, Halil 1957: "Mehmed II" *İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 7, 506-535.
- İnalcık, Halil 1958: "Arnawutluk" *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Vol. 2, 651-658.
- İnalcık, Halil 1960a: "Mehmed the Conqueror (1432-1481) and his time" *Speculum* 35, 408-427.
- İnalcık, Halil 1960b: "Murad II" *İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 8, İstanbul, 598-615.
- İnalcık, Halil 1960c: "Aḥmad Pasha, called Bursalı" *Encyclopaedia of Islam*, 2nd

- ed., Vol. 1, 292.
- İnalçık, Halil 1969/70: “The policy of Mehmed II toward the Greek Population of Istanbul and the Byzantine Buildings of the City” *Dumbarton Oaks Papers* 23/24, 231-249; in Halil İnalçık, *The Ottoman Empire: Conquest, Organization and Economy*, London, 1978.
- İnalçık, Halil 2002: “Wazır” *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Vol. 11, 194-197.
- İnalçık, Halil 2003: “Mehmed II” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 28, Ankara, 395-407.
- Jorga, Nicolae 1908: *Geschichte des osmanischen Reiches*, Vol. 1, Gotha: Friedrich Andreas Perthes.
- Jorga, Nicolae 1909: *Geschichte des osmanischen Reiches*, Vol. 2, Gotha: Friedrich Andreas Perthes.
- Kiel, Machiel 1996: “Filibe” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 13, İstanbul, 79-82.
- Köprülü, M. Fuad 1941: “Ahmed Paşa (Bursalı)” *İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 1, İstanbul, 187-192.
- Kut, Günay 1989: “Ahmed Paşa, Bursalı” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 2: İstanbul, 111-112.
- Orhonlu, C. 1978: “Kâsim Pasha, Djazari” *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Vol. 4, 722.
- Pálosfalvi, Tamás 2018: *From Nicopolis to Mohács: A History of Ottoman-Hungarian Warfare, 1389-1526*, Leiden & Boston: Brill.
- Philippides, Marios 2007: *Mehmed II the Conqueror and the Fall of the Franco-Byzantine Levant to the Ottoman Turks: Some Western Views and Testimonies*, Arizona: Arizona State University.
- Philippides, Marios & Hanak, Walter K. 2011: *The Siege and the Fall of Constantinople in 1453: Historiography, Topography and Military Studies*, Surrey and Burlington: Ashgate.
- Reindl, Hedda 1983: *Männer um Bāyezid: Eine prosopographische Studie über die Epoche Sultan Bāyezids II. (1481-1512)*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 1983.
- Repp, Richard C. 1986: *The Müfti of Istanbul: A Study in the Development of the*

- Ottoman Learned Hierarchy*, London: Ithaca Press, 1986.
- Runciman, Steven 1969: *The Fall of Constantinople, 1453*, Cambridge: Cambridge University Press, 1969.
- Savvides, A. 2002: “Zaghanos Pasha” *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Vol. 11, 384.
- Schwarz, Klaus 1981: “Eine Herrscherurkunde Sultan Murād II. für den Wesir Fazlullāh” *Journal of Turkish Studies* 5, 45–60.
- Stavrides, Theoharis 2001: *The Sultan of Vezirs: The Life and Times of the Ottoman Grand Vezir Mahmud Pasha Angelović (1453–1474)*, Leiden, 2001.
- Taeschner, Franz & Wittek, Paul 1929: “Die Vezirfamilie der Ğandarlyzāde (14./15. Jhdt.) und ihre Denkmäler” *Der Islam* 18, 58–115.
- Uzunçarşılı, İsmail Hakkı 1948: *Osmanlı Devletinin Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*, Ankara: Türk Tarih Kurumu.
- Uzunçarşılı, İsmail Hakkı 1963: “Hızır Bey Oğlu Sinan Paşa’nın Vezir-i Âzamlığına Dair Çok Kıymetli Bir Vesika” *Belleten* 27/105, 37–44.
- Uzunçarşılı, İsmail Hakkı 1974: *Çandarlı Vezir Ailesi*, Ankara: Türk Tarih Kurumu.
- Ülkü, Osman 2004: “Gelibolu Saruca Paşa Türbesi” *Atatürk Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 21, 241–259.
- Wittek, Paul 1951: “Ein Brief des Kaisers Johannes VIII. an den osmanischen Wesir Sarıĝa Pasha von Jahre 1432” *Byzantion* 21, 323–331.
- 今澤浩二 1995: 「オスマン朝初期におけるウレマー制の展開」『オリエント』45, 1–28.
- 今澤浩二 2013: 「オスマン朝初期における宰相制の展開」『オリエント』56/2, 65–82.
- 三浦清美・平野智洋 2014: 「1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語」『エクフラシス』別冊1号, 119–159.